Privatter+

3693文字

Public Unlisted

みんすきおまけ

　小さな雑居ビルに物々しい音が響く。
　何か重量の大きなものを手当たり次第に壁に投げつけでもしているかのような、およそ日常には似つかわしくない騒音だった。
　上階から聞こえてくるその音に、階段に足をかけていたヨシフは一瞬の躊躇もなくそのまま駆け上がっていく。想定外の物騒な事態にも怯まず動く体は訓練と経験の賜物だ。

　ぞわりと背中を撫でる感覚には覚えがあった。強い能力者が容赦なく力を行使する時のそれに間違いない。

　あっという間に階段を登り切ると、騒音はヨシフが予想した通りのドアの向こうから聞こえてくる。
　首から下げたライターに念力で火花を散らしながら、ヨシフは「霊とか相談所」のドアノブに手をかけた。

　日頃は清潔に整えられた相談所の室内はまるで台風でも通り過ぎたかのように荒れ果てていた。その有り様を途方に暮れた顔で見ていた所長————霊幻は、しかしすぐに気を取り直してヨシフの方へと振り返る。

「お前が来てくれて助かったわ。すげーいいタイミングだったな」
「あと五分も早ければもっと良かったな」

　普段は窓際に置かれているオフィスチェアが出入り口の側まで吹き飛んできて横倒しになってい

るのを立て直してやりながらヨシフはそう答えたが、霊幻は「いやいや十分だって」と軽く首を振り、まだかろうじて位置がズレるくらいで済んだのだろうソファを見遣った。

「あのままじゃこいつも怪我しちまってただろうしさ」

　そのソファには子どもが一人寝かされている。まだ小学生、確か十歳になったばかりのはずの少年である。
　いまは疲れ切って意識を失っているが、この相談所の惨状は確かにこの少年が招いたものだった。己の超能力を制御できずに暴走させたのだ。

「最近は調子良かったからちょっと油断してたな」

　仕方なさそうに笑う霊幻の顔は穏やかだ。
　大型の家具はまだわずかに動く程度で済んでいるようだが、逆に言えばそれら以外のすべてのものは部屋中に散乱している。霊幻の商売道具であろうパソコンや資料の類もさんざんに散らばっているが、それに関しても彼は「あっちゃー……」と軽く肩を落としただけだった。

「目の前でやらかしちまったから説得力ないかもしれないけどさ、前回の報告から今日まではかなり落ち着いてたんだよ」
「別に疑いやしないが、今日は何かあったのか」
「あー……お母さんにちょっとな、もののはずみで軽く力が漏れて、それで怖がられちまったらしくて。でもここに来るまではちゃんと自分で耐えてたんだぞ」
「そうか」
「順調に自分の力を扱えるようになってきてると思う」
「ああ、その辺はアンタの判断を信用してるよ」
「……お前が担当で本当に助かるわ」

　霊幻はそう言って眦をゆるめるが、その表情を見たヨシフは自分の前任者のことに思い当たってかすかに眉をひそめた。

　超能力を持つ人間というのはもちろん少数派ではあるものの、それでもそれなりの数が存在している。特にこの味玉県周辺で確認されている数は平均と比べても突出していて、政府お抱えの研究者の中にはその理由を究明しようと奔走している者もいるほどだった。まあその辺りの事情はヨシフのような現場の人間にはまだ関係のないことだ。

しかしそれが一般には認められていない能力である以上、超常的な力を持つ者、特に自分をうまく制御できない子ども――――そしてその親たちの苦労は計り知れない。普通の育児書には念力で玩具を振り回す赤ん坊の対処法など載ってはいないのだから。
　そんな親たちが頼れるものを求めて妙な宗教やたちの悪い組織に引っかかることも珍しい話ではなかった。

　そんな中、調味市近辺で「超能力の使い方を教えてくれる」と評判が立ったのが霊幻新隆だった。
　いっそ根も葉もないデマであればよかったのかもしれないが、霊幻には実績があった。影山茂夫と芹沢克也という、超能力者たちの中でも指折りの力を持つ二人が。
　おまけにそれ以外にもやたらとそういう縁があるらしく、霊とか相談所に出入りする能力者は数多い。慕われているのだと言われれば霊幻自身は笑うのだろうが。

　その評判が広まるにつれ縋れるなにかを探す者が相談所の戸を叩くことが増え、霊幻もそれに応じるうちに、政府の方でもその状況を黙って看過することはできなくなった。そうでなくとも影山や芹沢の件で監視の目は入っていたのだ。霊幻が新たに面倒を見るようになった超能力者についても政府に報告の義務が科せられて、担当者が定期的に干渉するようになった。
　ヨシフはその二人目だ。

　前任者はあまり霊幻を信用しておらず、最初から彼を「超能力者をたぶらかして何事かを企む無能力者」として見ていたふしがある。
　ある頃から霊幻は自分に超常の力がないことを隠さなくなった。それでも彼に縋る者は多かったようだ。超能力者の子どもを持つ無能力者の親にとってはむしろその事実こそが信用と敬意を強めさせる傾向すらあった。
　そんな自分を頼る者への霊幻の対応は「話を聞くだけだから」と金をとるわけでもなく、かと言って影山茂夫のように弟子にとって除霊を手伝わせるわけでもなく。それはほとんど慈善事業か奉仕活動の様相を呈していたが、前任者にとってはその何もかもが不信を煽られるものだったらしい。
　常々霊幻に対して不適切な態度をとり続け、ある時ついに大きな問題を起こして霊とか相談所の担当を解任された。
　そして次にお鉢が回ってきたのがある程度霊幻やその周囲と面識のあるヨシフだったというわけだ。

「ところで」

前任者のことは政府の人間としてもヨシフ個人としてもあまり愉快な過去ではないし、いまはそれより優先すべきことがあった。

「ん？　ああ、報告書な。すまん、このどこかにはあるからすぐに探して――――」
「それは後でいい。それより」

　本日ヨシフが霊とか相談所を訪れたのは確かに超能力者たちの報告を受けるためだったが、それはどうしても今すぐにしなくてはいけないものでもない。
　大股に近寄ると霊幻はヨシフの意図を察したのか大げさに後ずさった。入り口の方にヨシフがいるのだから逃げ出せるはずもないが。

「自分で分かってるだろうが、その腕を見せろ」
「う、いや……そんな大した怪我じゃ」
「それは俺が見て決める」

　尚も往生際悪く言い募ろうとするのを遮って手を差し出せば、ようやく諦めたのかおずおずと左腕を差し出された。

「ちょっと打っただけだし、利き腕じゃねえし」
「結構腫れてるな、痛いだろこれ」

　ジャケットとシャツを捲ると、前腕部が痛々しく腫れ上がっている。霊幻は「ちょっとだけな」などと言っているが、軽く触れただけで肩がビクンと強ばったのを見るとやはり相当な痛みがあるようだった。

「病院行くぞ」
「え、やだ」
「やだじゃない、折れてたらどうする」

　咄嗟に拒否した上、ぐぬぬとほぞをかむ霊幻の態度はやたらと子どもじみている。この場合政府の息がかかった病院に連れて行くことになるのだが、彼はそれを嫌っているのだ。面倒ごとを背負い込みがちなだけに既に何度かその世話になる羽目に陥っているがその度に苦い思いをしているらしい。ヨシフに言わせれば、そんなに嫌ならそもそも行かなくて済むようもう少し自ら心がけてほしいところだった。

さすがに諦めてすっかり大人しくなった霊幻の腕を応急処置として煙で固める。そうされている本人は何が面白いのかその様子を熱心に見つめていた。

「そういやあの上級悪霊はどうした？」

　芹沢が不在であることは分かって訪れていたが、所員でもなんでもないと強く主張しながらもほとんどフルタイムで相談所に入り浸っている上級悪霊がいないことが気にかかっていたのだ。

「今日の依頼で結構霊素使っちまってさ、とりあえずの補給に行くって。一時間くらいで戻るって言ってたからそろそろ戻ってくるはずなんだが」
「……アンタ、相変わらず一瞬目を離した隙に危ない目に遭う天才だな」

　日頃その面倒を見ている連中の苦労が偲ばれ目を眇めたヨシフに、手がかかることこの上ない男は不服げに唇を尖らせたが言い返してはこなかった。どうやらある程度の自覚は持っていると見える。

「悪いけどエクボが戻るまでちょっと待っててもらえるか。この状態でいきなり俺がいなかったらびっくりするだろうし、こいつのフォローも頼みたいから」

　霊幻は事務所の惨状と意識のない子どもを指して言った。

　痛みを痩せ我慢しているくせに子どもに向ける視線ばかりはひどく優しい。
　この男の厄介さにも、それ以外の何かにも、あるいは何もかもに————思わず悪態が口をついて出そうになったが、ヨシフにはただそれをやり過ごして頷いてやることしかできない。
　自分の役目はせいぜい病院に放り込むまでなのだということは分かっていた。